

1 図書館の動き

2009 年度も図書館にとって、大変動の年であった。

まず、事務組織が事務機構第二次見直しにより、グループ制から事務室へと変更になり、図書館事務部は復活しなかったものの、学術・社会連携部の下で、4 事務室へと変わった。これにより、図書館を統括する管理職は図書館事務長の 1 名から、各事務室に管理職が配置されたことにより、グループ制以前の事務組織に近いものとなった。

平成 19 年度(2007 年)「特色ある大学教育支援プログラム」(略称:特色 GP)に採択された本学図書館の取り組み「『教育の場』としての図書館の積極的活用-図書館の持つ教育力を教育に活かす-」が、2009 年度末をもって、3 年間の補助金対象の終了を迎えた。この間、全学部生が履修可能な正課授業「学部間共通総合講座『図書館活用法』」による体系的な情報リテラシー教育、各学部の授業の中で実施する「ゼミツアー」などによる、多面的な教育活動の展開の充実を行ってきた。これにより、「図書館活用法」のデジタルコンテンツ制作、「図書館活用法」の授業評価活動、国内外大学図書館の視察調査、全図書館職員を対象とした SD 研修など実施してきた。文部科学省からの財政支援は終了したが、こうした活動を 3 年間で終わらせることなく、今後も継続して体系的で多面的な図書館リテラシー活動を推進していく必要がある。

また、米沢嘉博記念図書館の設置・運営を始め「東京国際マンガ図書館(仮称)計画」については、大学における組織的位置付けが不明確であるため、現在図書館総務事務室が担っている。これらの業務は分掌事項外であり、職員の増員もなく、通常の業務を行いながら進めているのが現状である。

和泉キャンパス新図書館建設については検討が進み、基本設計の着手までこぎつけた。今後は機器備品、情報関連、サービス関連の検討を進めつつ、代替施設の建設、引越し等を経て、いよいよ建設が始まることとなる。さらに、中野キャンパス計画も進みつつあるため、図書館についても今後検討が求められる。

1.1 文部科学省特色GP関連事業

特色ある大学教育支援プログラム(特色 GP)「『教育の場』としての図書館の積極的活用」事業は最終年度を迎え、過去 2 年間の取り組みを継続するとともに、内容を一層充実、発展させた活動を展開した。主な取り組み内容は以下の通りである。

まず、「学部間共通総合講座『図書館活用法』」については、ハワイ大学のプログラム評価専門家の指導を受けながら評価活動を引き続き行った。2009 年度はこれまでに集められたアンケート、インタビューデータを基に、授業目標を明確にし、授業内容を再検討した。検討結果は 2010 年度の授業に反映され、今後は授業履修学生の目標達成度を評価していくことになる。

また、これまでは図書館活用法授業時のみ行っていた大学院生によるリテラシー教育補助を、2009 年度はゼミツアー、講習会にも拡大した。ゼミツアーに関しては、実施回数、参加者数の多い和泉図書館において、大学院生が図書館ガイドと情報検索実習の補助を行った。講習会に関しては、中央図書館、生田図書館で、大学院生による「論文・レポートの書き方」を開催した。大学院生が説明をすることで、経験談を聞くことができる、気軽に質問ができるなどの効果があった。

この他、図書館利用と文献検索の基本、主要データベースを簡潔にまとめたガイドの新規作成、そして前年度からの継続として、スタッフディベロップメント研修上級編の開催、デジタルコンテンツの追加、国内外大学図書館における情報リテラシー教育の調査、ゼミツアーアンケートなどを実施した。

なお、文部科学省からの支援は 2009 年度をもって終了したが、3 年間の取り組みの多くは 2010 年度政策経費予算をもって継続し、今後の図書館リテラシー教育活動につなげていく。

1.2 図書館リテラシー教育の実績

2010 年 2 月 26 日和泉校舎メディア棟において、4 図書館事務室の合同研修会「はばたけ図書館の力、明治の力」を開催した。この研修会の目的は、全図書館員が参加して、図書館リテラシー教育の中核をなす特色 GP の取り組みについて、共通の理解を深めることにあった。

報告内容は、下記のとおりである。午前は「図書館の現状と課題」(図書館総務事務長)、「和泉新図書館建設計画(中間報告)」および代替施設見学会(和泉図書館事務室)、午後は、学部間共通総合講座「図書館活用法」について、①「図書館活用法及び特色GP草創期について」(研究推進部長)、②「図書館活用法プログラム評価と2010年度授業計画」(図書館活用法タスクフォース)の2つの報告があった。上記の①では、特色GPへの応募理由、図書館職員が継承すべき重要事項などが説明され、②では、2009年度のプログラム評価について、ハワイ大学マノア校第二言語研究科で教育評価コンサルタントを専門とする渡邊有樹子氏から分析結果を聞いた。

さらに特色GP調査報告として、①「東海地区におけるラーニング・コモンズ及び情報リテラシー教育の積極的展開—名古屋大学中央図書館、南山大学名古屋図書館—」、②「韓国の図書館におけるデジタル情報サービスと学習支援—国立中央図書館、国立デジタルライブラリー、延世大学、梨花女子大学、翰林大学、江原大学—」の2つの報告があった。

研修会では、国内外の図書館リテラシー教育の実践例、今後の課題と対応策について共通認識を深めることができた。また図書館リテラシー教育の更なる活性化に資する先進的事例を学ぶ機会として、意義があったといえる。

つぎに、2009年度の取り組みについて、6項目に分けて簡潔にレポートしたい。

1. 図書館活用法

履修者数は、駿河台、生田地区で若干減少した。和泉地区では昨年度よりパソコン設置台数が多い教室を確保できたため増加したが、前年度と同じく抽選で履修者を決めた。

2. ゼミツアー

初年次教育を重視する流れの中で、和泉図書館では対応可能な限界に近い回数をこなしている。前年度と比べて回数が横ばいなのは、そのためであろう。中央図書館はゼミツアー回数がやや減少した。

3. 出張講義

生田図書館では、引き続き、食料環境政策学科1年生の基礎ゼミで各種情報検索法などを講義している。2009年度は4グループに対して、2回の講義、のべ8回実施した。和泉図書館では、図書館内で対応可能な人数を超えた場合など、出張講義を行っている。

4. 各種講習会

生田図書館では、開催回数を増やしているが、参加人数は減少している。見方を変えれば、新規導入当初より利用が定着しているとも言える。中央図書館、和泉図書館では、「レポート・論文の書き方」DVD上映会が好評であった。大学院生による「論文・レポートの書き方」講習会も参加者の満足度は高かった(中央・生田)。

5. オリエンテーション

新入生への図書館利用導入教育や新任教員への図書館利用ガイダンスなどである。和泉図書館、生田図書館は、参加者数を集計する際、新入生の数をそのまま採用しているが、中央図書館は会場参加者数を基礎としている。今後統一したい。

6. 見学・視察

中央図書館は、高校生の見学が前年度同様多い。和泉図書館、生田図書館も見学者数は増加しており、よい傾向である。

1.3 機関リポジトリ

2009年度は、次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業委託事業として国立情報学研究所から200万円、大学予算として1,000万円を投下した事業として、前年度に継続した著作権者への利用許諾書発送、および許諾論文を対象としたメタデータ・PDFファイルの作成を、業務委託によって実施した。前記対象は各学部紀要を中心として行った。その結果、登録公開論文数は、本年度新規登録1,700件弱で、累積計約5,600件となった。公開の詳細は、明治大学学術成果リポ

ジトリHP(図書館HPよりリンク)から参照できる。以上の事業については、2010年度も継続実施予定である。

1.4 まんが図書館

昨年度から引き続き、故米沢嘉博氏旧蔵書を中心に資料の分類・仕分け作業を、猿楽町第一校舎 1 階旧明治中学校・高等学校図書館を作業場として、経葉社に業務委託で行なった。資料の分類・仕分け作業が終わってからは、資料の配架装備作業を行なった。また既に分類・仕分け作業と平行して行なっていたデータ入力を基に、OPAC で検索できるようにデータ整備を行なった。

8 月には猿楽町第五校舎(旧高橋ビル)の開館に向けての最終的な第 3 期改修工事が実施され、その後必要な機器・備品も購入した。9 月には整理が済んだ資料を、猿楽町第一校舎の作業場から猿楽町第五校舎まで運び入れ、資料を3～5階の書庫内に設置されている書架へ配架した。作業が遅れていた1階ギャラリーの展示、2階閲覧室の書架についても平行して作業を行なった。米沢嘉博記念図書館のスタッフについては、9 月に米沢嘉博記念図書館専属の特別嘱託として3名採用し、その他のスタッフを派遣として採用した。

オープン日については長く「2009 年夏にオープン」として曖昧にしていたが、ようやく 10 月 31 日にオープンとすることを正式に決め、ホームページ等で告知を行なった。10 月 28 日には「内覧会」を開催し、同日大学内外の関係者を招いて「米沢嘉博記念図書館開館記念パーティ」を紫紺館にて盛大に催した。米沢嘉博記念図書館は 10 月 31 日にオープンを無事に迎えた。オープンの朝には、NHK テレビ「おはよう日本」で生中継が行なわれ全国へ発信された。オープン当日には多くの利用者が来館し、盛況であった。また新聞、雑誌等の報道メディアの取材もたくさんあり、連日のように米沢嘉博記念図書館のオープンについて紹介された。

米沢嘉博記念図書館はあくまでもサテライト施設であり、最終目標の「東京国際マンガ図書館(仮称)計画」については、10 月 22 日に紫紺館にてプレスリリースを行ない、多くの報道陣が集まった。翌日には新聞の記事として掲載された。関心は国内だけに留まらず、「New York Times」等のメジャーな新聞やインターネットサイトでも「東京国際マンガ図書館(仮称)計画」についての記事が掲載された。

米沢嘉博記念図書館は蔵書数約7万冊であるが、残り約7万の他、米沢嘉博氏以外からの寄贈資料も未整理のまま猿楽町第一校舎の作業場にあり、今後順次整理を進めていくことにしていく。猿楽町第一校舎の作業場以外に府中グラウンド倉庫にも、大型ゲーム機、学年誌等の附録資料、サブカルチャー関連図書等を保管している。

まんが図書館(仮称)検討委員会を年度内に 3 回開催し、米沢嘉博記念図書館 WG を年度内に 8 回開催して検討を行なってきた。委員会としては「東京国際マンガ図書館(仮称)設置大綱」を最終的にまとめ、この大綱を学長へ提出し、委員会は解散した。今後は「東京国際マンガ図書館(仮称)準備委員会」(仮称)を設置し、設置へ向けて具体的な検討を引き継ぐことになった。

いずれにしろ、「米沢嘉博記念図書館」の運営、「東京国際マンガ図書館(仮称)」の検討については、本来図書館として事務分掌の範囲を超えており、少ない職員の遣り繰りの中で行なっている。今後は独立した事務組織を設置しての検討が必要である。

1.5 和泉キャンパス新図書館

2008 年度末に設計業者選定方式としてプロポーザル方式を実施することが決定し、参加業者 5 社が選定された。2009 年 4 月に参加業者による技術提案書が提出され、ヒアリングを実施し、審査委員会による審査が行われた。審査の結果は、4 月 27 日に和泉キャンパス新図書館建設委員会委員長から理事長へ報告書を提出し、4 月 28 日に常勤理事会がプロポーザル審査結果を承認した。その後 5 月 13 日開催の理事会において新築工事設計業務の受託業者が決定され、5 月 28 日開催の評議員会において報告された。

こうして、6 月 17 日に第 1 回の和泉キャンパス新図書館(仮称)新築工事設計定例会議(以下「設計定例会議」)が開催された。設計定例会議は調達部・図書館事務室・設計業者で構成され、毎週水曜日に開催し、2009 年度は第 35 回(3 月 31 日開催)まで行われた。設計定例会議で挙

げられた図書館運営に関わる課題については、図書館専門部会が検討する役割を担った。図書館専門部会は図書委員・図書館職員で構成され、毎週木曜日に開催し、設計定例会議と連動して活動した。また、図書館専門部会の下に各種 WG を設置し、実務面での検討を行った。2009 年度発足の WG は、代替施設運用・蔵書計画 WG、利用サービス WG、情報関連 WG、備品・サイン計画 WG の 4 つであり、全て図書館実務担当者で構成した。

このような体制で設計を進めるなかで、京王電鉄との協議及び桜の木の根の状況により、中庭側へ建物が寄ることになり、第三校舎前広場に閉塞感が出るということがわかってきた。これを解消するため、設計定例会議で様々な可能性を検討し、建物の位置及び形状の変更、代替施設の運用方法を変更することを提案した。具体的には、新図書館の形状を矩形から直線形に変更、代替施設を第四校舎と隣接場所の仮設建物で運営し、一括解体・一括建設とするという内容である。この提案は、施設担当部署・設計業者の専門的知識と発想から生まれたもので、何よりも素晴らしい図書館を作りたいという図書館員にも勝る熱意があったと感じている。この提案は 12 月 1 日開催の常勤理事会において審議され、建設に関する計画の変更が承認された。これにより、第三校舎前広場の閉塞感が緩和され、図書館とメディア棟で作るゲート性を演出しキャンパスの顔作りが実現できるようになった。さらに、建物の形状がシンプルになるため利用者の使い勝手のよい設計ができるようになり、代替施設においても利用者の利便性を高めることができることとなった。

次に外観について、2 月 17 日開催の施設設備専門部会において検討し、3 案から 2 案に絞り、2 月 25 日開催の和泉キャンパス新図書館建設委員会(以下「建設委員会」)で 1 案に絞った。そして外観と平面計画と合わせて基本設計書を 2010 年 1 月までにまとめ上げた。これについて、3 月 3 日開催の理事会において、若干の意見はあったものの、「和泉キャンパス新図書館(仮称)新築工事基本設計(案)」が承認された。(以下「基本設計」)。なお、基本設計は、教授会、和泉委員会に報告している。

また、夏期休暇期間中から後期にかけて全国の図書館見学を行った。大学図書館は広島修道大学、東京都市大学をはじめ 16 館、公共図書館は川口市立中央図書館、新潟市立中央図書館など 10 館、さらには国立国会図書館関西館も見学した。見学には図書館員のみならず、施設課職員・設計業者も参加することで、互いを理解し共通認識を持てる機会となった。

そのほか、代替施設の名称について、建設委員会で仮設建物を「和泉図書館A館」、第四校舎を「和泉図書館B館(第四校舎)」とすることを決定した。これについては、資産登録の手続きを進めることになっている。

2010 年度は、基本設計を基に実施設計を進める。実施設計では、建物本体の設計と同時に内装やインテリア、サイン、情報設備についても同時に計画検討し、運用面についても詳細な検討を推進していく。

1.6 電子資料

2009 年度も引き続き雑誌の電子化を進め、新規購読雑誌電子オンリー契約のほか、電子ジャーナルパッケージ「ProjectMUSE」「EMeJ95」を新規契約し、契約数の少なかった人文・社会科学系の電子ジャーナルの充実を図った。8 月にはリンクリゾルバを Exlibris 社の SFX に、横断検索システムを同社の Metalib に変更し、ホームページも一新して、電子ジャーナルの利用環境の向上を図った。また e-book の NetLibrary を 221 タイトル購入し、データベースでは「雑誌記事索引集成データベース」「Web 民力」(2010 年 4 月より導入)の新規契約を行った。

こうした 2009 年度の電子資料の利用統計を見たところ、2008 年度と比較して電子ジャーナルの検索数は全体的に減少傾向にあるが、フルテキスト表示数は増加していた。ただし、利用状況はパッケージによりばらつきがあり、かねてより利用の高い自然科学系ジャーナルが集まった学協会系の小型のパッケージ(ACS、Nature など)の利用率は高く、一方、契約金額が高く収録誌数の多いビッグ・ディール方式のパッケージでフルテキスト要求が比較的少ないものもあり、費用対効果という観点から課題が残る。また人文・社会科学系のジャーナルの利用が少なく、この分野の利用促進を考える必要がある。

一方、利用者の検索行動を SFX の利用統計から調べると、フルテキスト要求の多い Nature など

はそのフルテキスト表示数の数%程度の回数しかSFXで検索されておらず、SFXで検索し論文にたどりつくという検索パターンをたどっている利用者は少ないことがうかがえた。

また、契約数、利用数そのものはまだ少ないが、e-bookの利用、特に全文表示件数は前年度比で40-50%増加しており、e-bookの利用は広がりつつある。

これらの結果から、現状では、利用者の多くは従来と同じSFXによらない方法で従来から利用し続けてきた自然科学系ジャーナル(洋)を利用し、またe-bookを活用する機会も増えているようである。今後、契約内容の見直しや利用促進の努力を行いより効率的で役に立つ提供内容とする必要がある。